

シンポジウム「巨大災害へのレジリエンスをどうとらえるか？」を開催

●大学院環境学研究科、減災連携研究センター

大学院環境学研究科附属持続的共発展教育研究センター、減災連携研究センターは、5月20日(水)、減災館において、シンポジウム「巨大災害へのレジリエンスをどうとらえるか？ビッグデータ・インフラ技術・土地利用マネジメントの統合」を開催しました。これは、文部科学省の大学発グリーンイノベーション創出事業「グリーン・



会場の様子

ネットワーク・オブ・エクセレンス (GRENE)」環境情報分野「環境情報技術を用いたレジリエントな国土のデザイン」(GRENE-City、代表者：林同センター長)の成果報告の一環として行われたものです。GRENE 総括である小池俊雄東京大学工学研究科教授による基調講演「ビッグデータでレジリエンスをこうとらえる」では、地球規模での環境問題やレジリエントな社会の構築には、確かな情報の共有による分野間連携だけでなく、科学と社会の連携によるステークホルダーの協働が重要であることが述べられました。続いて、GRENE-City メンバーによるショートスピーチ「私はレジリエンスをこうとらえる」と、中林一樹明治大学特任教授、難波伸治名古屋市役所企画課長らが参加したパネルディスカッション「レジリエンスをどうとらえるか？」では、レジリエンスの概念、どのように確保向上していけばよいか、そのためにハードとソフトのアプローチをどう融合させるかについて活発な討論が行われ、レジリエンスについての様々な発想を分野横断的に繰り返し議論することの重要性が指摘されました。

展示会「建物に見る病院と医学校の歴史」を開催

●附属図書館医学部分館

附属図書館医学部分館は、2月13日(金)から5月29日(金)までの間、展示会「建物に見る病院と医学校の歴史」を開催しました。これは同館4階にある医学部史料室の所蔵品の中から、広く日本と西洋における病院と医学校の歴史を建物から振り返るもので、古書、絵画、図面、写真などを展示する企画です。



展示会の様子

1443年に創設された近代病院の原型といわれる施療院オテル・デュー (Hôtel-Dieu 神の家) や、16世紀のイタリアの病院は、キリスト教精神と深く結びついています。日本では、福井藩の医学所 濟世館が1805年に創設され、医学教育と研究を行いました。

名古屋では、尾張藩医師総取締の浅井家が邸内に建てた私塾を1831年に医学館と改称し、毎年、春と秋に医師試験を行いました。1871年(明治4年)、洋医学校を名古屋にも設立すべき、という洋学者伊藤圭介らの建議により、名古屋藩は、評定所跡(名古屋市中区丸の内3丁目)に仮病院を、本町通りを挟んだ西側の奉行所跡に仮医学校を設置しました。その後、医学講習場などを経て、1914年に、愛知県立医学専門学校・愛知病院は、現在の医学部・附属病院がある鶴舞キャンパスへ新築移転し、2014年に移転後100周年を迎えました。展示では、「愛知県公立病院癩狂室復元図」(1880年)、「愛知医学校前面の図」(1884年)、「記念写真帖：創立五拾週年昇格祝賀」(1920年)、「空襲による被災と応急復旧写真」(1945年頃)、「医学部附属病院整備計画図」(1955年頃)など、それぞれの時代を象徴する建物の図や写真が多く、来館者の関心を集めました。